

アクセルはベアトリスのもとに行くだろうか？

『忘れられた巨人』と語り

小野寺 進

1. 問題の所在と目的

ベアトリスがアクセルを残し、船頭によって息子の墓がある島へ渡るところで物語は終わる。その後、船頭がベアトリスを島へ送り届けた後再び戻ってきて、アクセルをベアトリスのもとに連れて行ったかどうかは語られていない。アクセルはベアトリスのもとに果たして行くだろうか？

「何を忘れるべきか、いつ思い出すべきか」と忘却と記憶をテーマにしたこの小説の特色はその語りにある。読者は三人称で語る遠い昔の物語世界内部に引き込まれ、その中でアクセルとベアトリスの旅物語を追体験する。老夫婦の旅はウィスタンとガウェイン卿の登場により、いつしか霧の正体であるクエリグ退治への探求へと変わり、やがて霧が晴れ記憶が蘇ってきた後は、自分たちの息子が眠る墓を目指す。その間、ガウェイン卿による2度の追想と、最終17章の船頭による一人称の語りで物語は終わる。

本発表では、物語世界外の語り手の権威を危うくする一人称現在時制で語る最終章での船頭の語りに、作者イングロが読者を翻弄しようとする新たな試みがあることを検証した。

2. <わたし>の顕在化と現在時制

異質物語世界、つまり三人称で登場人物が言及される物語世界、であるにもかかわらず、第1章から語り手が物語の中に登場し、自己の存在を「わたし」として顕在化させる。物語の第1章で登場する「わたし」は、19世紀のウォルター・スコットやサッカレーが書いた歴史小説に登場する語り手の「わたし」と同様、読者に物語の時代や状況を解説する役割を担っている。しかしながら、『忘れられた巨人』という物語は歴史小説ではなく、歴史や神話あるいは伝説を身に纏ったファンタジー物語である。ファンタジーの語り手は、時間の整合性にとらわれることなく、ストーリー・テラーとして空想世界の主題を比喻とともに読者に伝える役目を果たす。歴史小説の語り手とは異なるのはその自由度である。本来ならば、現在という時制から過去を眺めている存在である語り手は、現実の物語作者と同様に物語の結末を知る人物である。ところが、アクセルが最終的に向こう岸にたどり着いたのかどうかは物語世界外の語り手によって読者に伝えられる、あるいは暗示されるはずである。ところが物語は船頭が一人称で語る場面で終わり、物語世界外の語り手が登場し物語の結末を語ることはない。

『忘れられた巨人』において、イングロは初めて三人称という語りを採用した。それはアクセルを焦点化しとする老夫婦の旅物語で、物語世界外の語り手による登場人物の描写により物語の他者性を担保しようとするものである。その一方で、「登場人物のことで語るのがいちばん効果的」というイングロ自身の言葉が示すように、ガウェイン卿と船頭といった二人の登場人物による等質物語世界がアクセルとベアトリスの物語に埋め込まれ、物語を近視眼的に読者に届ける。ガウェイン卿の追想は二つあり、そこでは「わたし」であるガウェイン卿は基本的に過去時制で読者へ語るが、自分の心の中の思いや考え（自己の内省）を現在時制で提示する。この現在時制というのは、今実際に感じ、思っている様子を直接読者に伝える役割を担っており、ガウェイン卿の語りは伝統的な一人称過去の語りに、自己の内省を現在時制で提示するという語りの進化を見せる。このガウェイン卿の語りとは異なり、最後の17章の船頭による一人称の語りでは、大部分が現在時制で語られ、アクセルとベアトリスの老夫婦の様子が船頭の言葉を通して読者に届けられる。

モニカ・フルーダニクによれば、物語の即時性を強調するために物語現在が使われているとしている。こうした「感じたまま」あるいは「思ったまま」を直接生の形で読者に届けるための現在時制の採用が文学において徐々に一般化されてきたのは1880年代からである。近年では、デイヴィッド・ミッチェルやアンソニー・ドーアなどをはじめとする数多くの作家によって現在時制で物語が書かれているが、そのほとんどが全編現在時制による物語である。『忘れられた巨人』の最終章で、船頭は次のように物語を一人称現在で締めくくる。

I hear him coming through the water: Does he intend a word for me? He spoke of mending our friendship. Yet when I turn he does not look my way, only to the land and the low sun on the cove. And neither do I search for his eye. He wades on past me, not glancing back. Wait for me on the shore, friend, I say quietly, but he does not hear and he wades on. (*The Buried Giant* 345)

記憶が定かではない霧の中でのアクセルとベアトリクスの旅物語と両者の関係が、現代世界に身を置く物語世界外の語り手によってこれまで過去時制で語られてきた。しかし、最終章で記憶を取り戻したアクセルとベアトリクスの旅の行方と両者の関係は船頭の視座を通してのみ語られる。物語世界の外にいる語り手によって信頼をもってこの老夫婦の旅と関係を見てきた読者は、二人はこの先どこへ向かうのか、その関係はどのようなのかは不明のまま物語を読み終えてしまう。もし、船頭がこの場面に至り、初めて登場したのであれば、読者は大いに混乱し、どう判断したらよいかわからないかもしれない。しかし、イシグロは物語のはじめの第2章で読者に三人称で船頭を導入しておくことで、判断の規範をあらかじめ教えてくれるのである。つまり、すでに船頭と出会っている読者はこの最終章の船頭の言葉を額面通り受け取ることを戸惑う。最終章において、船頭は舟に乗り込もうとするアクセルに、一度に二人を乗せることはできないと説き伏せる。「海面の動きが不穏」という理由をつけ、「向こうで一緒に暮らせる」と諭すが、一緒に乗せるとは一言も言わない。最終的に、船頭と仲直りすると約束しベアトリクスのもとを離れたアクセルは、結局船頭と一言も言葉を交わすことなく、物語は終える。アクセルは、船頭が自分を向こう岸に渡してくれたとしても、ベアトリクスと一緒に暮らすことはできないことを悟っている。

3. 『忘れられた巨人』と映画的語り

最終章で読者に現在時制で提示する物語効果は「映画的イメージ」を作り出すとフルーダニクは言う。現在時制で提示された物語世界の中に、過去時制で構成された文章が挿入されている。通常の物語においては、過去時制は過ぎ去った出来事の表現であるが、ここでは過去時制は自身の内なる心の言表行為であり、現在時制は映像的内容を言葉で描写している。言わばそれは、映画の場面のように、過去の情景を今眼前にあるかのように提示することを意味する「映画的語り」と言えるかも知れない。語り手が描写によって光景を読者の眼前に見せるのではなく、光景そのものを現在時制で提示することで、映像として直接読者に届けるのである。そこには、語り手を通じて物語解釈を伝えるのではなく、読者に自由に判断できる余地を与えてくれるのである。

その効果は物語世界外の語り手のオーサーシップにまで及ぶことになる。最後の手前まで物語を語り、すでに物語の結末を知っているはずの物語世界外の語り手は物語のオーサーシップを登場人物の一人で信頼性が置けない船頭の語りに委ねる。それは物語を遠い眼差しで見てきた読者を映画の一場面に放り込み、そのまま中世の物語の中に置き去りにしてしまうことを意味する。そこに、既存の物語の語りの様式をさらにダイナミックに展開しようとする作者イシグロの挑戦と、新たな語りの地平を築いた作品、それが『忘れられた巨人』と読み取れるかもしれない。

主要参考文献

- Browska-Szerszun, Sylwia. 'The giants beneath: Cultural memory and literature in Kazuo Ishiguro's *The Buried Giant*' *Crossroads: A Journal of English Studies* (2017) 30-41.
- Fludernik, Monika. *An Introduction to Narratology*. (2005) Translated by Patricia Hausler-Greenfield and Monika Fludernik, London: Routledge, 2009.
- Hogan, Ron. Personal interview. 2000. *Beatrice.com* (2000). Rpt. in *Conversations with Kazuo Ishiguro*, Ed. by Shaffer, Brian W. and Wong, Cynthia F., Jackson: University Press of Mississippi, 2008. 156-160.
- Ishiguro, Kazuo. *The Buried Giant*. London: Faber & Faber, 2015.
- _____. '“I Remain Fascinated by Memory”': SPIEGEL Interview with Kazuo Ishiguro.' Interview by Michael Scott Moore and Michael Sontheimer. *Spiegel Online* (October 5, 2005), www.spiegel.de/international/spiegel-interview-with-kazuo-ishiguro-i-remain-fascinated-by-memory-a-378173-druck.html
- Matthews, Sean. '“I'm Sorry I Can't Say More”: An Interview with Kazuo Ishiguro' *KAZUO ISHIGURO Contemporary Critical Perspectives* Ed. by Sean Matthews and Sebastian Groes. London: Continuum, 2009.
- Swaim, Donald. 'Don Swaim Interviews Kazuo Ishiguro' *The Donald L. Swaim Collection (MSS #177)*. Robert E. and Jean R. Mahn Center for Archives & Special Collections, Ohio University Libraries. Rpt. in *Conversations with Kazuo Ishiguro*, Ed. By Shaffer, Brian W. and Wong, Cynthia F., Jackson: University Press of Mississippi, 2008. 89-109.